

教師の語りからみたキャリア変遷

— 小学校教師に対するインタビュー調査を通して —

上原尚子*・田中理絵

A narrative study of teacher's career
: Interview investigation to elementary school teachers.

UEHARA Naoko, TANAKA Rie

(Received September 30, 2011)

I. 教師のキャリア形成

教師という職業は他の職業と異なり、平社員・係長・課長・部長といった役職がないため、外部者には、その教師が学校でどのような立場にあるかはわかりにくい構造となっている。主幹教諭や生徒指導主任などさまざまな役割はあるが、管理職のように教頭・副校長・校長というはっきりとした階級の役職はない。たとえば、教職歴の浅い若い男性教師であっても、小規模校では体育主任などのような責任の重い仕事を任されることがあるというように、立場や役職でみる外面的なキャリアがわかりにくい仕事である。ゴッフマン(Goffman,E.)によると、キャリアの概念は主観的アイデンティティといった内面的なことと職務上の位置や生活スタイルに関連する外面的なことの2つの側面を併せもっており、他者との関わりによって変化していくものである。

閱歴という概念のもつ一つの長所は、それが二つの側面を併せもっていることだ。一つの側面は自己についてのイメージとか主観的アイデンティティと言った〔本人が〕大事にしっかり抱いている内面的なことどもに結びついており、他の側面は職務上の位置とか、様々の権利義務の関係とか、生活スタイルに関連し、公開されていて誰にも接近できる制度的複合体の一部をなしている。したがって閱歴という概念は、自分はこういう人間だと想っていると個人が〔自己について〕考えることを表明するときに、その言葉を資料としてそれほど重要視する必要もなく、個人的なものとか公開されているもの間、〔彼の〕自己と〔その自己にとって〕重要な意味をもつ社会の間、を自由に往来することを許すのである。(E,ゴッフマン 1957=1984, pp.133-134)

このようにキャリアというのは役職だけで示されるのではなく、その人物のアイデンティティを巻き込んで変化していくものである。教師という仕事は、子ども、保護者、地域の人々、同僚などさまざまな立場の人々と毎日関わることから、他の職業以上にアイデンティティ面におけるキャリアの変化の影響が大きいと考えられる。

*山口大学大学院

Ⅱ. 本論文の目的

就職して新入社員として上司に仕事のノウハウを教わり、後輩が入ってくると逆に指導する立場になるというように、年齢を重ねて仕事を経験していくことで、人は成長し、仕事に対する考え方や仕事内容、立場などが変化していく。教師の世界では、一般的に、20代・30代前半は若年期、30代後半・40代は中堅期、50代・60代はベテラン期と分けられる。ところで、教師の仕事を続けていくなかで仕事への考え方はどのように変化していくのだろうか。本稿では、教職経験の長いベテラン教師に対するインタビューから、教師のキャリアー自己の教員としての歴史を語ってもらうことで、年代別の変化するであろう教師の目標や仕事内容等－を明らかにすることとした。それによって、教師という仕事のキャリア段階が画定でき、それぞれの段階の目標が解明できると考えた。

Ⅲ. 本論文の方法と調査対象

2011年4月～8月の間に勤務校の異なる小学校教師3名（50代男性）に対して、それぞれ1時間程度のインタビュー調査を行った。インタビュー調査は半構造化面接で、教師の仕事に対する思い、仕事内容、現在・過去の勤務校の特徴を中心に聴き取り調査を行った。被調査者の承諾を得たうえでICレコーダーを利用して録音し、文字起こしした文章データを使用して分析・考察を行う。

表1. 調査対象者の属性

	年代	性別	教職歴	現在の役職	勤務校数
A教師	50代	男性	34年	校長	7校
B教師	50代	男性	25年	教頭	6校
C教師	50代	男性	28年	教頭	7校

Ⅳ. 教師の仕事と仕事に対する思い

ここからは、インタビューによって得られた口述から教師という仕事の特徴について浮かび上がらせていくこととする。

(1) 「教師の仕事」とは何か

以下の口述のように、3名の教師とも「教師の仕事とは子どもに関わる」という点で共通した。

筆者：教師の仕事とは何だと考えますか。

A教師：学力をつける！授業が一番大事な仕事。今はそれだけじゃいけないってのはある。

知・徳・体っていうか。でもそういうのは家庭（の仕事^{括弧内は筆者加筆。以下同様}）かなって思わんこともない。今はなんでもかんでも学校って感じはあるよね。

でも学校は学力！7割は授業を受けちよるんじゃけ（＝受けているのだから）。

家庭で学校のような学習をすることはできんけえね。極端なものはないと思うんじゃけど、教員である以上子どもに直接関わることをしたいって思うと思うよ。だから行政の仕事ってまさに教員の仕事って仕事じゃないと思う。

でもそこで働いている人は今自分がしてる仕事は子どものためになるって思って仕事をしちよる（＝している）。そう思わんとやっっていけんよね。現場の教員はそういう風には思わんかもしれんけど。

A教師：子どもに関わる仕事がしたいと思っている教師は多いはず、直接関わらなくても子どものためになると考えてることで仕事ができる。子どもにまったく関係ない仕事はないからね(=ないからね)。

B教師：担任で教えるっていう願いをもって子どもたちと関わって、子どもが笑顔になっていくということが一番うれしかったかな。

朝、おはようございますから始まって、帰りの会でさようならするみたいに、自分が担任で1日が終われることが嬉しかった。

新採ついたときはちゃんと教えられるか、子どもにどうやって教えようって思ってたけど、最近はそのやったらこの子は学校にくるのか、保護者がどう思ってるのかを考える。生活の習慣だとか人と人との人間関係作りに関してどうなんかなって考えるほうが増えた。

C教師：ほんとだったら子どもに勉強を教えることって言えたらいいけど、やっぱり生徒指導的な面が大きいね。

毎年、(子どもが)昨年と違うって思うし。

保護者が変わっているよね。考え方とか、子どもに対する思いとか昔と同じようにはならなくなったなって思う。

若いときのことはあんまり覚えてないけど、勉強教えるってことを凄く思っていたと思う。

でも校務分掌とかもってそれ以外にも仕事はあるんだって思ったかな。

それまでの教師経験に加えて、学校を支えていく役職についていることから、単に「子どもに勉強を教える」といった答えではなく、生徒指導面や保護者への対応、地域の人との関わりや教育行政との関係など、教師という仕事を広い視野から見ようになっている。

(2) これまでの勤務校についての口述のなかにみられる学校という職場に対する思い

筆者：これまで勤務されてきた学校の中で働きやすかった学校や大変だった学校はありますか。

A教師：んー、それは難しいね。

校長、教頭、教諭…やることがどの学校でも違ったので、一概に比較できないけれど…。

特にどこの学校にいったから良かったとか悪かったとかはないね。

正直言って、一番大変だったのは県教委の時だね。今は3,4人でこなす仕事を、1人ですべてこなさんといけなかったからね。家になかなか帰れなかったし、一番大変だったって言ったらここよね。一番大変だったときは県教委だけど、現場にいるときはそんなに大変と思ったことはなかったけどね…。

B教師：自分は恵まれていたと思う。

どこいってもまわりの皆さんが一つのチームというかみんなで作っていこうという雰囲気、職員室はどこでもわいわいって感じだった。職員室に帰ったら一人で抱え込むことなくみんなで解決策を見つれたりって雰囲気があった。これがないと学校として大変だと思うよ。

ある学校ときは、3年間は担任をもったけど、他は児童支援として問題を抱える子どもや保護者の支援が主な仕事で、空き時間がほとんどなかった。

B教師：けど最後の2年間は担任をもたせて貰ってよかったなっていい終わり方ができたと思う。やっぱり学校の先生になったら担任がいいなって思いながらね。

C教師：若い頃は何かかもが新鮮で楽しかったし、専科担当だったのでその科目で子どもと関わったのが楽しかったかな。

附属という違う雰囲気 학교も体験できたって思うし、でもこの辺から大変さも感じ始めたかな。今まで味わったことのない縦社会の世界だった。年齢、経験じゃなく附属で何年働いたかの縦社会。

その後、現場に戻って教務主任とかして…中規模校の時が大変だったな。

教頭職で学校をまとめることが大変で、地域からの要望など先生の要望など直接自分にくるからね。そこにいるときは大変だったな。ポジションがあがるにつれて範囲が広がるからね。

A教師は教育委員会という現場を離れた仕事という経験があるのだが、その時ほぼ一人で仕事をこなしていた。B教師の口述のなかにもあるが、学校というのは一つのチームであり、一人ではなく、みんなで協力していく仕事である。それゆえA教師は今までの勤務校ではなく、教育委員会にいた頃の大変さが大きかったと考えられる。C教師の口述からは、附属という特殊な現場での研究授業などの経験や教頭という役職についての話から、役職や仕事内容が変わったことでまわりから見られる自分の仕事やポジションが変わっていることが分かる。

(3) 仕事量についての口述からみられる現場の変化

筆者：仕事量については増えたと感じますか。

A教師：現場が忙しくなったのは間違いのないね。なぜかはわからないけど。

20代、30代前半の頃は今みたいに拘束されるって感じはなかったけどね。職員運動ができるくらい時間があつたかな。

あと行政の仕事は増えたね。昔からやるべきことっていうのがあってどんどん新しいことが積み重なってきたことで忙しくなったってのはある。

丸付け、指導要録、通知表…っていう昔からある仕事があるでしょ。それに教育改革で教員の評価制度・アンケート調査の依頼、調査ものが増えた。

あと子どもや親が変わった、ここ10年くらいかな。前は、先生が前に立ったら静かにするのは当たり前じゃったけど、きちんとできない子どもが増えてきてるね。

昔は先生が前に立ったら静かにするとかできて、一斉指導できていたのに今はできんね。

子どもが変わったってことは親が変わってきたっていうこと。

しっかり家庭で育てる親もいるし、ほったらかして何にもしない親もおる。

非常識なことを学校に要求してこられてもそれに対応するだけで時間をとられるよね。

学校に求められるものは学力の保障じゃけ(=だから)、学校で一番大事なものは学力保障、でもそれだけに時間を注げんのが実際よね。

無駄なものをなくしていかないと教師が子ども学力を中心に、体力や心を立派に育てることに力を注ぎたいけど、それ以外にもやらないといけないことがあるから忙しいと感じるんかもしれないね。

B教師：増えてるのは増えていると思う。自分が新採のころはあんまり仕事がなかつただけかもしれないけど。

B教師：社会人ソフトボールに参加したりしてたけど、放課後の仕事は仕事でちゃんとできていたしね。

最近はコンピュータが入ってきて、いろいろメールで送れたりとかで締切日が短くなったね。調査ものが増えたかな。情報技術の発達でやらなければいけない期間が短くなった。短くなった分調査もどんどん増えるからね。研究視点が増えれば増えるほど調査が増えるからね。

高速道路を走ってる感じ、便利だけど疲れるときはどっと疲れるよ。下道をゆっくり走る感じが懐かしい。

そういう仕事は向き不向きがあるし、人と関わって疲れた感じとデータを処理して疲れた感じは違うよ。

人によって仕事のこなし方は違うけど、やっぱりみんなで協力するのが大切だね。みんなよくやってくれてる。忙しい中で仕事をこなして、上手に時間作って子どもと遊ぶ先生も多いかな。

ゆとりがあってこそ仕事も頑張れる。終わらない仕事はないから。

今日できんことは明日でもできるって思って上手に使い分けていくことが大切かな。締め切りが迫ったらやるもの、計画も大事だけど計画通りにいかななくてもいかななりに何とかすればいい。

C教師：年々増えていると感じますね。ポジシヨンのなことも関係あると思うけど。

地域や家の範囲のことも学校に求めてきすぎ、最近はまだ法律になってるからね、食育とか…。

あと総合的な学習の時間が入ってから、土曜日がなくなって忙しくなった。土曜日の午後がゆっくりしていたよね。先輩からいろいろ話を聞いたり、ゆっくり仕事したり。

担任をしていた頃は感じなかったけど、教務になって書類系が増えましたね。調査物が多かった気がする。与えられた役職によって見方が変わった。

授業の準備には苦には思わなかったけど、学校全体で何かに応募するときに文章作ったりとか、若い時にはなんでよって思いながらしてたかも。

今はこなしていかないと学校が回らないって思うとやろうと思う。

3名の先生の口述から、教育現場が忙しくなっていることがうかがわれる。情報機器の発達や教育政策の転換によって新たな仕事が増えるのだが、しかしA教師の口述もあるように、これまでしてきた仕事なくなるわけではなく、仕事は積み上げられていくわけであるから、教師の仕事量は増加する。また、B教師やC教師の口述から、役職や校務分掌などの自分の役割によって、仕事量や仕事内容が変わることがわかる。

(4) 学校の雰囲気についての口述からみられる職場に対する思い

筆者：今まで勤務してきた学校ごとの雰囲気についてはどう思われますか。

A教師：毎日9時くらいまで残る学校もあるし、早く帰る学校もある。校風、校風…まあ伝統だね。地域によって教育委員会からの管理の厳しさが違う。地域によって違いますよ、全然！

あと若い頃は40、50代の女性の先生に怒られてばかりだったね。そういう力をもった信頼されている先生が女性教員を束ねてた。そういう先生がいると職員会議がまとまるんよ。校長みたいなもんよ、女性をまとめるっていうところでしょう。

校風っていうのは学校の雰囲気はその場にいる人間でつくるもの、教師、児童全員でつくりあげていくものなんよね。

A教師：教室に入れば、担任と子どもたちと掲示物、机の並び方が関わっていくけど、やっぱり大きいのは人間の関わりじゃね。

B教師：基本の子どもは変わらないと思うけど、地域性とかはあると思う。

人によって空気は変わってくるのは事実だね。上が違うと全然違うから。

人って関わって違うと思う、先生達の雰囲気が悪いと子どもたちに影響するからね。

誰がその空気を作っているかはわからないけど…

あったかい生き生きできる空気を作っていきたい。わいわいと真剣にっていうのをバランスよく。プライベートの話をする人もいるし、いつも教育の話をしているわけじゃないから、子どものこと、こんなことがあったとかいろいろ。そういう空気がいいなって思う。今まで体験してきたし。

職場の環境はすごく大事！

今は自分が一緒になって作っていけたらと思う。楽しく過ごしたほうがいいよね。

C教師：地域の違い、それぞれの気風とか、そこの地域の地域性があるね。

大規模校になると団地があって入れ替わりが激しかったりするし。

あと附属と公立は子どもの質が違うし。

上司にはめぐまれていたと思う。あんなふうになりたいなって思っていた。でも中には外面がいいっていうか、地域にいい顔をする人もいたけど、そういう人が仕事をがっばり持って帰ってくる、実際仕事をするのは下の人間だからね。

これらの口述から、単に「職場の人間関係」といった具体的な一言ではなく、いろいろな学校の校風や人たちがつくり出す空気などを経験してからこそという内容が聞けた。その時々職場の雰囲気は、人々が関わり合うことで成り立つ職場であるからこそ、自分のポジションや仕事内容、年齢が関わっていることがわかる。

(5) 役職に就いての口述からみられる仕事に対する思い

筆者：今の役職に就かれて思うこと、変わったことは何ですか

A教師：校長としては教職員一人一人を大事にする、それが伝われば安心して仕事をしてもらえると思う。協力して仕事をする、一人になっている教師をださないこと。

学級づくりと同じことよね。立派な教員がいても組織としてまとまっていなかったらだめ。

子どもに主体性を求めるのなら、自らやるという意識をもつこと。

教員が校長を気にしてできないということがないように、判断に迷ったときだけ聞きにくるように言っているけど。

B教師：みんなと楽しみたいって思いからみんな楽しんでおられるかなっていうのが気になるようになったかな。楽しそうに過ごしているか気にしてる。

先生方が健康で仕事をしていることがいいなって思うから、そのサポート役だと思ってる。

自分は管理職にすごく恵まれていたから。割りとらせてもらってたし、「なにかあれば私が責任とるけえ」って言ってくれた。

C教師：教頭の前に教務主任だったときがあったけど、教務主任は全体をまとめる役割だけど管理職じゃないんよ。でも教務主任も管理職側に思われて管理職に言えない文句を言われたり間に挟まれた感じ。教務は上に文句言えないし。

それで教頭になると、管理職以上の教育委員会っていう上の存在がでてきた。

管理職になると見方も変わったっていうか。地域も巻き込んでの学校っていうか。なんていうか学校に対する見方が変わったね。

でも知っている先生と一緒に働くことになってやりにくかった。先輩とか、かつての同期とか、校長に指導しろって言われても指導とかようできないけど…。強い口調では言えないよね。結局はメンバーなんよ。

管理職の問題で、同学年のつながりが強いから管理職がどうわけるかが重要で、若いとき、先生同士のことを分かってないなって思う人事もあった。

先生同士、子どもと先生のことをよく分かっていないとだめになる。同学年同士がうまくしていると職員室の雰囲気も明るくなるしね。

大きな学校になると職員室以外に同学年室っていうのがあって職員室におりて来なくなる。ブスってした管理職がいるとなかなか降りてこないよね。

3名の教師の口述から、副校長とか校長といった肩書きのある役職についたことにより、学校全体だけでなく、地域社会や教育行政についても考えなければならなくなったことがわかる。それまでのように「対・子ども」を中心に据えるだけでは済まず、特に、一緒に働く同僚との関係を優先的に考えるように変化している。また、自分が管理職の下で働いていた経験を活かし、そのときに感じていた自分の考え方を織り込みながら、今の役職をこなしている様子もうかがえる。

とはいえ、C教師の「知っている先生と一緒に働くことになってやりにくかった。先輩とか、かつての同期とか、校長に指導しろって言われても指導とかよう(=よく)できない」という口述から、管理職につくことで教職における地位および役割は明確になるものの、しかしそれまでの人間関係や年功序列によって、必ずしも自分の教職アイデンティティが役職に支配されるわけではないこともわかる。

(6) 理想の教師についての口述からみる3人の教師観

筆者：理想の教師像や理想の先生はいましたか

A教師：もちろんいますよ。世話になった人でね。

一番すごいなって思ったのが実行力があるっていうところ！夜中まで残って仕事をした。

自分でどんどん動くから教員もついてくるよね。

女性でも女性をまとめたっていう先生はなかなか太っ腹だなって思うよ。

B教師：こういう先生になりたいっていうのはそれに近づいてきていると思う。

世の中の見方も変わってきているけど、自分が思う先生像は変わらない。

それは後世に伝えていきたい。

時代に合わせていけない部分と変わらないものがある。

子どもに対して、人に対して、人との関わりね。

誰かのために一所懸命になる、子どもたちに伝えるべきものはなんなのかを考えていきたい。

C教師：理想の先生がいた。実際に自分ができているとかはわからないけど。

やっぱり全て同じように出来るわけではないからね。

目指しつつも自分のやり方やカラーをだせるようになると、自分なりの攻め方で子どもたちと関わったなって思う。

A教師は、自ら行動していた教師を理想としており、先述の「自らやるという意識をもつこと」が重要であるという口述に繋がっていることがうかがえる。B教師は明確に自分の理想像を語らなかつたが、内に秘める確かなものがあることがうかがえる。また、C教師は、理想の先生に近づくというのではなく、今までの経験から、自分なりのいいところを混ぜながら理想の教師になろうとしていることがわかる。若年期・中堅期にどのような先輩教師と関わるかということが、教師という仕事に対する考え方に大きく影響することがわかるだろう。

V. 教師のキャリア変遷

ここからは、教師キャリアを「若年期・中堅期・ベテラン期」に分けて、それぞれの特徴を述べたいと思う。

(1) 若年期

若年期は、「子どもにどうやって教えるか」「何もかもが新鮮で楽しかった」というように、通常、責任の重い校務分掌を免除されるなかで、自分のもてる力で精いっぱい子どもと関わることができ、またそれに没頭することが許される時期であることがわかる。

A教師：もっと若いときを思い出してみたら、N小の6年間はいろいろしてたけど充実してた。

担任、教員をやって、クラブ活動をしとったけえね。

B教師1：新採ついたときはちゃんと教えられるか、子どもにどうやって教えようって思ってた。

B教師2：若手の男の先生はすぐにネットワークが繋がってわいわいできた。

C教師：若い頃は何もかもが新鮮で楽しかったし、専科担当だったのでその科目で子どもと関わったのが楽しかったかな。

(2) 中堅期

以下の口述は中堅期の教師の仕事の様子について尋ねたものである。徐々に校務分掌における役割・責任も重たくなりはじめ、授業研究や保護者への対応に時間を割かれるようになることがわかる。また、若年期は教え方や子どもとの関わり方に重点が置かれていた授業についても、「授業研究」「研究授業」という言葉が頻出するように、求められる水準が高くなっている。授業は、他の職業のようにノルマ達成基準があるわけでないため、授業作りの努力も「きりが無い」(A教師)。子どもと授業のなかでどのように関わるか、そして、よりよい授業をつくることとはどういうことかを研究することが中堅期の目標になる。

A教師：授業の研究はきりが無い、ここまでやったから授業が完璧っていうノルマ達成という感覚がない。

B教師：附属に行くことがプレッシャーだった。それからは研究授業とか担当の授業の主任になったり。

C教師：研究授業のために深夜まで残って授業案書いたり、ハードで女性には勤まらないだろうね。

(3) ベテラン期

とはいえ、中堅期は自分の授業、自分の教師としての力量の深化を図ることを目的とできるのであるが、管理職になるとそうはいかなくなる。同僚の教師や子ども、地域社会の住人など学校を取り巻くものすべてに対して気を配り、教師の働く環境を整備しなくてはならない。学校を運営していく立場として全体に目を配り、よりよい環境をつくるのがベテラン期の目標となる。

A教師：校長としては教職員一人ひとりを大事にする、それが伝われば安心して仕事をして貰えると思う。

B教師：先生方が健康で仕事をしていることがいいなって思うから、そのサポート役だと思ってる。

C教師：管理職になると見方も変わったっていうか。地域も巻き込んでの学校っていうか。何て言うか、学校に対する見方が変わったね。

また、インタビューでの語りを分析すると、質問に対して端的に短く返答するというよりも、20年以上教師を続けている経験から、教師はどうあるべきかなどを含む、より抽象的で教示的な内容を含ませて説明しようとする様子が共通してみられる。

A教師：校風っていうのは学校の雰囲気はその場にいる人間でつくるもの、教師、児童全員でつくりあげていくものなんよね。

B教師：誰かのために一所懸命になる、子どもたちに伝えるべきものはなんなのかを考えていきたい。

C教師：子どもたちと表現をしてきて、お互い「これ」ってわかる瞬間がある。生きた相手の成長に関われるっていうのはやりがいがある。そういう仕事って思うし。

このように、教師という仕事を総括的・教訓的に後身の者に対して説明することもベテラン期の教師の役割として捉えられていることも特徴のひとつであろう。

VI. まとめと今後の課題

本論文では、教師の仕事が続けていくなかで仕事に対する考え方や思いがどのように変化していくのかをベテラン教師のインタビューから分析・考察した。その結論として次の3点が明らかになった。

まず第1に、若年期に重視していた「対・子ども」への考え方は変わらず、中堅期・ベテラン期になるにつれて保護者や地域社会、教育行政など学校を取り巻くものが輪のようにプラスされていることがわかった。それらに気を配りながら、「すべてのことが子どものためになるなら」と仕事に打ち込むことが、どのような仕事でもこなすことのできる原動力になっているのではないかと考えられる。子どもと接することを大事に考える姿勢から、直接子どもに接することのない仕事に移っても、教師としてのモチベーションをあげるために「子どものために」と自分に言い聞かせているのではないだろうか。

第2に、「対・同僚」に関しては、それまでの自分の経験をもとに、管理職としてよい環境で働いてほしいと考えており、同僚の人間関係の様子にも気を配っていることがわかった。ベテラン教師は、社会人としての責任と人間関係を個々の教師に任せきるのではなく、どのようにしたら学校全体の仕事が上手くまわるかを考える役目も管理職にあると考えている。学校を運営する立場として、子ども、保護者、多くの教員という学校を取り巻くすべての人間関係を把握することが求められる。

そして第3に、管理職になるまでは、はっきりとした肩書き・役職がつかない教師という職種であっても、教師という仕事から派生する経験や校内で任される役割を重ねることによって教師のアイデンティティにおけるキャリアが変化する様子が抽出できた。しかしやはり、管理職につくことで教師という仕事の内容や社会的期待をより明確に意識できるようである。そして役職は、C教師の口述にあったように、自分より年上の同僚や年配の地域住人と接しやすくする機能ももち、本人に自覚はないかもしれないが、そうした期待に対して応えようとするのが教師アイデンティティの形成にも影響を及ぼすことが考えられる。主観的アイデンティティといった内面的なことと、職業上のポジションという外面的なことが合致することでより、仕事はしやすくなるし、周りとの接し方も変わってくると考えられる。

ところで、面接調査を通して、各教師が経験したそれぞれのエピソードや出会ってきた人物の違いから教師という仕事への思いや語り方が違うことが判明した。勤務校も、こなしていく仕事・役職、受けもつ学年も、出会う同僚や子どもたちも一人ひとり異なる。そういった経験をもとに教師は自分なりのキャリア変遷をたどり、「教師という仕事は、こういうことか」といった手引書のようなものを独自に作り上げるのだと考えられる。そして、そのキャリア変遷は、実際にしている教師の仕事というわかりにくいものの手引書になるのではないだろうか。今回の研究ではベテラン教師にのみ焦点をあてたが、ベテラン教師が通ってきた若年期、中堅期で現在働いている若年教師、中堅教師のインタビューもあわせて分析することで、教師という仕事のキャリア変遷や、キャリア段階ごとの特徴・考え方の差異についてより明確にできると期待できる。

<引用・参考文献>

- ・ Goffman, E. (1957) *Asylum*. 石黒毅訳『アサイラム』誠信書房、1984年
- ・ 小林弘道 (2010) 「教師の仕事特性と多忙感の関係についての研究」『教育経営研究』第16号、pp.13-23
- ・ 斉藤俊則・都丸けい子・大野精一 (2009) 「初任教員の教師キャリア発達等に関する探索的な調査研究(その1)」『教育総合研究：日本教育大学院大学紀要』2、pp.135-144
- ・ 斉藤俊則・都丸けい子・大野精一 (2010) 「初任教員の教師キャリア発達等に関する探索的な調査研究(その2)」『教育総合研究：日本教育大学院大学紀要』3、pp.119-137
- ・ 迫田裕子・大竹晋吾・西山久子・納富恵子・花島秀樹・谷友雄・森保之 (2010) 「教師のキャリア形成と意欲的な教師育成を目指す大学・大学院の取り組みについて」『福岡教育大学紀要』第60号、pp.203-214
- ・ 芝山明義 (2010) 「教師の専門性と教師教育の課題」『鳴門教育大学研究紀要』第25巻、pp.158-165
- ・ 溯上克義 (2005) 『学校組織の心理学』日本文化科学社
- ・ 古屋喜代美 (2010) 「教師がふり返る自らのキャリア形成における壁とは何であったか」『神奈川大学心理・教育研究論集』第29号、pp.89-97
- ・ 油布佐和子編著 (2009) 『教師という仕事』日本図書センター
- ・ 李春善 (2009) 「教師集団の「同僚性」に関する研究」『教育経営研究』第15号、pp.97-107